

体育・スポーツ現象を支配する「法則性」 に関する一考察*

岡 田 猛

A study on the Social Processes in Sport and Physical Education

Takeshi OKADA

はじめに

「形式的には成立しているが、実質的には未だ成り立っていない¹⁾」段階から数年経過した今日、体育学はどれほどの進歩を遂げたといえるだろうか。

体育諸学の中でも比較的あたらしい領域だといわれる体育社会学においても、「実態調査だけでなく、これまでの多くのバラバラであるが一応の研究成果を取りいれて、仮説的理論として大胆に構成していくこと²⁾」が提唱される段階にたちいたっている。このような時点において、体育社会学を含めた社会科学的な体育諸学の理論構成にあたって必要と思われる一つの視点をマクロ的にはあるが主張することは、如上の共同の事業にたいするささやかな貢献となりうるのではないかと考え、小稿を草する次第である。

本論の概要をあらかじめ記しておくことにしたい。

体育・スポーツ現象は生活の一つの領域であり、そこにおける「生活の共同³⁾」としての社会関係は「イデオロギー的社会関係」に範疇化される。したがって、その生活領域における社会過程を支配する法則は自然史的過程を辿るとされる「物質的社会関係」の法則性に依拠するものであり、このことはとりもなおさず体育・スポーツ現象の科学的な説明に関する確固とした手順を指定することになる。

いわゆる「基底への還元」がそれである。

1. 一つ的生活領域としての体育・スポーツ現象

一般に、生活とは生存活動であり、栄養・生長・運動・知覚などの生物体に特有な現象が生活現象と考えられている。しかし、本稿で問題とされる「生活」概念の外延は、文化人類学の基本的カテゴリーとしての「文化」、つまり、他のいかなる有機体にもみられることのない、後天的学習対象としての人間固有の事象一切に限定したものであることをはじめにことわっておきたい。他の動

* 1975年11月1日 受理

物にくらべておよそ一年の生理的早産であるといわれる⁴⁾ほど出生時において諸能力に劣るヒトが、万物の霊長と目される全存在の支配者に変貌することを考えるとき、文化の内面化としての学習作用の重要性に思っていたるのである。

このようにみえてくると、体育・スポーツも歴史的必然性をもってある時点で人間によって創造され、継承・伝達され、発達・変容してきた文化といえるのであり、人間生活の有機的構成領域として存在し、機能してきたものである。

物質文化、精神文化と並んで身体文化を基本的な文化の要素とみなす近年のソビエトのスポーツ社会学において、社会計画の重要な位置を占めるものとしての身体文化に関する時間配分 (Time Budget) の研究が要請されている⁵⁾のも、体育・スポーツが生活サイクルにおいて確たる位置を占有しつつあることを示唆するものであろう。

2. 体育・スポーツ現象の成立要因

人間の生活サイクルにおいてパターン化されつつある体育・スポーツはいかなる要因によって成立するものだろうか。

G. Erbach は、身体文化・スポーツを「目的的、系統的に人々の身体的資質、能力の完成をもたらす社会過程⁶⁾」と規定し、このような「身体文化領域における多様な社会過程は、特殊法則の存在の表現であり、一般的な社会発展法則の効力の表現である⁷⁾」とみなしているが、体育・スポーツにおける社会過程の「質」ないし「次元」、ひいては「法則性」の解明にとって、その成立要因は基本的な意味をもつように思われる。

中村は、人間がスポーツを楽しむための最低の条件として余暇時間・技能・費用・仲間・精神的な解放をあげ⁸⁾、高部は「体育現象を存在たらしめ、また、機能づけ条件づけているもの」として、生活必需物の獲得・余暇・身体活動の運動としての意識化を提示している⁹⁾。

極言すれば、あらゆる生活領域が体育・スポーツ現象の態様にかかわりをもつともいえるが、そのうちでも比較的重みのある要因として二者の考え方は一応首肯できるものであろう。

ところで、筆者は本稿の意図ともてらしあわせて、体育・スポーツ現象の成立要因のうち「余暇」をとりわけ重視するものである¹⁰⁾。もちろんここでいわれる余暇とは、ことばの本来の意味での余暇、つまり生存のための物質的基盤が確保され、しかもそのうえに一定の消費的活動の選択を許容しうるほどの物的基礎にうらうちされた時間をさすものである。

3. イデオロギー的社会関係としての体育・スポーツ現象

(1) 物質的社會關係（生産關係）とイデオロギー的社會關係

マルクスによればはじめて社会学が科学的基盤のうえにすえられたといわれるが、それは生産關係の発見によるものであった。

周知のレーニンの規定¹¹⁾をうけて、島田は物質的社會關係を次の三点によって特徴づけている。

- ① 労働による人間と自然との連関、物質代謝を媒介する社会関係
- ② 人類史を貫通する根源的な関係
- ③ 認識論的に人間の意識・意志から独立した関係

ここで③については若干の敷衍を必要とするが、それは必ずしも人間の個別的意識を通過することがないということではなく、人々によって意識されていることもあるし意識されていないこともあるが、しかしこの関係は人間の意識によっては恣意的に左右されない客観的な存在性をもっているというふうに解すべきであろう。

これにたいしてイデオロギー的社会関係とは、必ず「形成されるまえに人間の意識を通過する関係¹³⁾」であり、人間の表象・観念に媒介された人間と人間の関係であるといえよう。

物質的社会関係とイデオロギー的社会関係、土台と上部構造、社会的存在と社会的意識の対概念の対応および連関と区別に関しては「実践」範疇の位置づけの問題もあってなお確定していないが、特別の課題考究を除いた場合は、ほぼ前者相互、後者相互をイコールとみなしてさしつかえないように思われる。

(2)、「経済的社会構成体」— die ökonomische Gesellschaftsformation — 概念の理解をめぐる
近年「経済的社会構成体」概念をめぐる論議が活発である。

マルクスの「経済的社会構成体の発展を一つの自然史的過程と考える私の立場」という叙述¹⁴⁾にみられるように、それは史的唯物論の中核的カテゴリーをなすものであり、したがってその理解の仕方如何は史的唯物論そのものの理解の根幹にかかわってくる問題だからである。

経済的社会構成体の理解をめぐる議論は、「生産関係の総体たる土台と、上部構造との両者を包摂し、統一する概念¹⁵⁾」とする立場と、「一定の生産力の発展段階に対応した生産関係というものを、『生成、発展、消滅』という必然的な運動法則をもった有機的統一体として把握したもの¹⁶⁾」と解する立場に大別される。

前者の理解にしたがえば、生産関係の総体としての土台に加えて上部構造の諸領域における社会過程も自然史的過程を辿るものとされるのに対して、後者によれば自然史的過程は土台、生産関係にのみ限定されるということになる。

もちろん、いずれも訓古学的には典拠とした著作のそれぞれの記述箇所に正当な根拠を有するものであるが、しかし前者は「社会生活の種々の分野のなかから経済の分野を取り出すことによって、またあらゆる社会関係のなかから生産関係を、それ以外のすべての関係を規定する基本的な、本源的なものとして取り出すことによって¹⁷⁾」社会の唯物論的な把握をなしとげたマルクスの基本思想を稀薄化ないし曖昧化するものとして批判されざるをえないだろう。

マルクスが「経済的社会構成体という概念を当該の生産関係の総体として確定し、このような構成体の発展が自然史的過程であることを確定して、はじめて社会学を科学的な基盤のうえにすえた¹⁸⁾」とするレーニンの指摘が、「経済的社会構成体」概念理解の適切な典拠として意味をもってくるように思われる。

すなわち、マルクスによって自然史的過程を辿るとみなされたものはあくまでも生産関係の総体＝土台なのである。

(3) イデオロギー的社会関係としての体育・スポーツ現象

各人各様の無数の行為からなる社会過程は秩序を欠いた「混沌」のようにみうけられるけれども、そのなかから根源的、基本的な関係として生産・交換・分配・消費をめぐる人と人との関係を析出してくることによって、社会史も自然史の延長、特別の発展段階としてたちあらわれてくることになる。

ところで、体育・スポーツ現象の基本的な成立要因としてあげた余暇は、そこでおこなわれる諸活動にたいしていかなる特性を付与するものであろうか。

それは、余暇時間のその使われ方にたいする認識論的な意味での物質的な「無指定性」といえるのではなかろうか。

体育・スポーツは、多々ある余暇活動のなかから人々によって選択されて現象するものであるから、体育・スポーツをめぐる人間の社会関係はイデオロギー的社会関係と規定できる。この点で、中村、高部がそれぞれ体育・スポーツの成立要因、余暇利用のしかたの方向指示者として「精神的な解放」、「意識化」をあげていることは当を得ている。

余暇の本来の意義を「個人と社会を媒介する労働の人間化」に求めた大河内や¹⁹⁾、「スポーツ第二義論」という高部の主張も²⁰⁾、実は体育・スポーツ現象のイデオロギー社会関係たることに無関係ではないのであり、上部構造としての体育・スポーツの性格を反映したものであるといえるだろう。

4. 体育・スポーツ現象の科学的説明視点

では上部構造に含まれる体育・スポーツをめぐる社会関係、および時の経過にともなう動的側面としての社会過程にはなんらの規則性、傾向、法則性は存在しないのだろうか。また、もし存在するとすればそれはいかなるレベルのものでありうるのだろうか。

「固有の理論を確立する段階までに熟していない」といわれる体育史が、「人類発展の諸段階を通じてみられる身体＝運動の一般理論と各段階の特殊理論とを検討して・体育史固有の理論仮説を確立する²¹⁾」ことをめざしているように、体育・スポーツ領域における社会過程が一定の傾向、法則性を有することは社会科学的な体育学諸分科の成立根拠である。

したがって、問題になるのはそこでいわれるところの「法則性」の次元であり、「体育史に関する『固有の法則性』の確立」にあたって、それがイデオロギー社会関係であるがゆえにもたざるをえない科学的な説明手順を通過しているかどうかであろう。

「社会関係を生産関係に還元して、そしてこの生産関係を生産力の水準に還元し²²⁾」、自然史的過程を辿る生産関係の合法的展開過程のなかでさらに上部構造の体育・スポーツ諸現象が位置づけられるときはじめてそれらの真の原因があらわになり、ランダムではなく、歴史的必然性をもつ

た現象として説明されるのである。

したがってイデオロギー的社会関係としての体育・スポーツ現象を支配する諸法則は、M. Weber のような独自の「固有の法則性」—Eigengesetzlichkeit²³⁾—などではなく、あくまでも生産関係を支配する自然史的レベルにおける「法則」に依拠した「法則性」にとどまるものである。

さらにいえば、体育・スポーツの生産関係をも含めた他の社会関係にたいする能動的な反作用も、その究極的な物質的規定性の視野のなかにおいてこそはじめて真の意味内容が理解できるものではなからうか。

以上述べてきたような基本的観点・視角は、これから筆者が体育社会学、体育原理を展開していくにあたってのパースペクティブとなるものであり、この方法の具体的適用による有効性の検証と成果如何は筆者に課せられた責務である。

注

- 1) 加藤橋夫：体育学研究法 日本体育学会編 杏林書院 p. 31, 1957
- 2) 影山 健：体育社会学の方法と課題 体育社会学研究会編 道和書院 p. 119, 1972
- 3) 福武 直は、政治的・経済的・宗教的等々の諸関心にもとづいて形成される人間相互の交渉・関係、つまり「人間における生活の共同」を社会学固有の研究対象としている。
福武 道：社会学の方法と課題 東大出版会 p. 21, 1969
- 4) アドルフ・ポルトマン：人間はどこまで動物か 高木訳 岩波新書 pp. 61-62, 1961
- 5) V. Artemov：Social Planning of Physical Education and Sports activity. International Review of Sport Sociology (以下 I. R. S. S と略す) Vol. 6, pp. 104-106, 1971
- 6) G. Erbach：The Science of Sport and Sports Sociology—Questions Related to Development—Problems of Structure. I. R. S. S. Vol. 1, p. 63, 1966
- 7) G. Erbach：ibid., p. 65
- 8) 中村敏雄：近代スポーツ批判 三省堂新書 p. 17, 1968
- 9) 高部岩雄：体育学原論 逍遙書院 pp. 6-32, 1962
- 10) もちろん筆者はプロ・スポーツをスポーツから排除するものではない。ここではプロ・スポーツの成立を規定する「受け手」大衆における余暇の存在を指摘するにとどめておきたい。余暇活動の職業化のメカニズムについては一稿を要するであろう。
- 11) ヴェ・イ・レーニン：「人民の友」とはなにか 全集刊行委員会訳 国民文庫 p. 15, 1956, 「物質的社會関係（すなわち、人間の意識を通過しないで形成される関係、——人間は生産物を交換することによって生産関係にはいりこむが、ここには社会的生産関係があることを意識さえしないで、そうするのである）」。
- 12) 島田 豊：現代と思想 No. 14 青木書店 p. 10, 1973
- 13) レーニン：ibid., p. 15
- 14) カール・マルクス：資本論 全集刊行委員会訳 大月書店 pp. 10-11, 1968
- 15) 芥川集一：社会構成体の理論と集団、講座現代社会学2 集団論 青木書店 p. 30, 1966
- 16) 北村 寧：「社会構成体」概念に関する一試論 社会学評論第80号第20巻第4号 有斐閣
- 17) レーニン：ibid., p. 12
- 18) レーニン：ibid., p. 18
- 19) 大河内一男：余暇のすすめ 中央公論社 p. 139, 1974
- 20) 高部岩雄：ibid., p. 100
- 21) 岸野雄三：体育史、現代保健体育学大系……2 大修館書店 p. 224, 1973
- 22) レーニン：ibid., p. 16
- 23) 大塚久雄：社会科学の方法 岩波新書 p. 67, 1966

Summary

In sport sociology which is a relatively new field of the sciences specializing in sports, a theoretical synthesis is becoming urgent.

The writer, in this paper, would like to present comprehensively a considerable viewpoint in synthesizing theoretically in sport sociology as an empirical science.

In considering the nature of laws governing physical education and sport phenomena as one field of life, leisure, fundamental composing factor of physical education and sports, is of much significance. As leisure can be often synonymous with "free time", one of characteristics of leisure is the non-designation toward activities done in it. Physical education and sports are selected consciously from among many leisure activities, and accordingly they are categorized in "ideological social relations."

Insofar as physical education and sports are ideological social relations, on the interpretation and explanation about them it is essential to reduce to the concerned production relations by which they are prescribed extremely. Then the interpretations are in scientific reason at first.

The theory construction in sport sociology is impossible without consideration about correlation to other fields of life, in particular economy, and the economic explanation of physical education and sports is the coming theme confronting us.